

『西鶴諸国ばなし』 卷五の一「灯挑に朝顔」再考

——茶道伝書との関係を中心に

石 塚 修

はじめに

貞享二（一六八五）年正月刊行の『西鶴諸国ばなし』卷五の一が「灯挑に朝顔」である。『西鶴諸国ばなし』の目録には、題名の下にその章の主題にあたるような語句が添えられている。たとえば、卷一の一は「公事は破ずに勝／奈良の寺中にありし事／知恵」とあり、「知恵」によって東大寺と興福寺の争いを奉行が解決した話が描かれている。卷五の一は「灯挑に朝顔／大和国春日の里にありし事／茶湯」となっていることから、この章が「茶の湯」に焦点を置いて書かれたことは明らかである。

この章についてのこれまでの研究には、藤井隆「西鶴諸国ばなし小考」¹⁾・宗政五十緒「『西鶴諸国ばなし』の成立」²⁾・佐藤悟「『灯挑に朝顔』の構造」の三つの論文が挙げられる。いずれの論も、この章を、(A)導入部・(B)「奈良のひかし町の楽助と呼ばれた茶人の朝顔の茶事」・(C)「むかしの巧者の八重葎の古歌を趣向とした茶事」・(D)「ある人の天の原の歌を趣向とした唐の茶湯」の四つに分けて論を展開している。

藤井隆氏は『老談一言記』をもとに、後の二つの話を「小倉色紙」にまつわる武野紹鷗に関するものだと指摘し、「それを西鶴らしく簡潔に（人名等を全く略して）作品の中へ織り込んだ」としている。宗政五十緒氏は導

入部以外の三つの話について、『槐記』や『老人雑話』を典拠とした有名茶人松屋甚十郎・武野紹陽・千利休の三人にまつわる話であるとし、さらに時間的空間をも朝・昼・夜と対応させて綿密に構成された「複雑な構成の『はなし』へと彫琢された」章であることを指摘している。また佐藤悟氏は、『江岑夏書』などの茶書を引用しつつ、「天の原ふりさけ見れば春日なる」・「八重むくらしけれる宿さびしきに」・「こぬ人をまつほの浦の夕なぎに」という千利休と関わりの深い「小倉色紙」の三首を中心に作られた章であり、「来ぬ人を」の一首にあえて触れなかったのは、「俳諧における『ぬけ』的な趣向」であると指摘する。

こうした先行研究に対して、先年私は、この章はむしろ(B)と(C)・(D)と二つに分けるべきで、それぞれには新旧の茶人の姿が対比して描かれていると主張した⁽⁴⁾。そのように読むことが、有働裕氏が提言した「原話や典拠探しから脱却した読み」につながると思えたからである。ただし、その際に紙幅の都合で言い尽くせない部分もあったため、今回再び(B)の「朝顔の茶の湯」の話の部分がこの章で果たす役割を見直すことで、「灯挑に朝顔」の章の構成のあり方について考察することにした。

導入部と茶の湯伝書

この章の冒頭、

野は菊・萩咲て、秋のけしき程、しめやかにおもしろき事はなし。心ある人は歌こそ和国の風俗なれ。何
によらず、花車の道こそ一興なれ。

という部分を導入部とすることは、文脈の上から異論はない。ただし、この部分から「和歌」のことが想起されるところとして、宗政五十緒氏らのように、「和歌」の掛け物にまつわる話の方に重点を置いてこの章についての論を進めるのは問題があると考える。これまでの論は(B)の「朝顔の茶の湯」の部分を単に茶の湯巧者の話の引き立て役として、ここに重きを置いて読むべきでない根拠として、この導入部分の表現を用いてきた。事実、宗政

氏は、「それに直接する(B)説話(筆者注・朝顔の茶の湯)には和歌についての叙述はない。右の部分は(B)説話に関する限り、そこに置かれるべき構成上の必然性はないはずである。これはむしろ(C)(D)の説話のための伏線として、ないしは襷染として、まくらに打つておいた句と見るべきであろう。」⁶⁾として、いわれるもわかる。つまりは、この導入部の書き方に即すると、この章の主眼は後半の茶の湯巧者の話であり、いわゆる(B)説話の部分に関しては、「花車の道」から導かれてきた部分に過ぎず、ここにさほど重きを置いて読む必要を認めないとする考え方と受け取れる。

しかし、たとえば次に示す、延宝八(一六八〇)年に書肆風月堂から刊行された『利休茶湯書』(六卷六冊)の巻四の冒頭の一節を見ると、あながちそうとは断定できないようである。

……先茶湯者になりたくおもひ候は、其身すなをにして花実ある事をたしなむへし、惣して人たる人は実にもすまず、花はかりにてもすまぬ也、ことに茶湯は風流を専にしたるものなれば、言の葉のやさしき道もしらすしては無下にいやしとおもわるゝものなり、京のれきくの方にて茶湯の師をする人、茶湯に参りける時に、定家の掛物を殊に掛られける其歌に

夕立に袖もしほ、のかり衣 かへうつりゆく遠方の雲

と有掛物なり、それを一覽仕、扱く見事成御かけ物かな、ことに定家卿の御筆と申歌も面白き御歌なり、袖もしほ、のかり衣、海辺の景気見るやうに被遊候歌にて候へば、一しほ御重宝候へとくり返しく被申ける、其内に和歌の道しりたる人ありて、扱々おかしき事かな、此袖もしほ、のかり衣をうしほにてぬれたる景気と思はれけるとすいりやうして、その、ち有所にて先日之歌のかけ物、歌の心いかふ御かんし被成候か、私体ハ何とも合点まいらざる歌にて御入候と申候へハ、いかにも海辺夕立など、いふへき歌とも被申候、いよくおかしかりける名高き茶湯者東山殿はしめて遠州公まで歌道のなきハ一人もなし、古田織部殿歌ハたては見申さす候へとも、大坂にて片桐市正殿へ茶湯の時、椿進られける狂歌二

未明より召よせらるゝお茶湯のたまく椿まいらするなり

か程の狂歌もたゝにてはならぬ事なり⁽⁷⁾

このように「歌道」の素養があることは、旧来より茶人の必須条件として求められていたのである。天正十八（一五九〇）年、皆川山城守宛「山上宗二記」別本奥書（故酒井巖氏藏本）にも、

コピタ タケタ 侘タ 愁タ ドウケタ

花ヤカニ 物知 作者 花車ニ ツヨク

右十ヶ條ノ内、能以得タル仁ヲ上手ト云。但、口五ヶ條ハ悪シ。業初心ト如何、密伝⁽⁸⁾。

この「花車」については「華奢」と解せられる一方で、東京大学付属図書館蔵本では「こびた たけた 侘た 愁た ひえた とうけた 花やかに 物知 作者 花車につよく」となっていることから、この「花車」は「花車事」「花車道」として考えられていた可能性もあり、『西鶴諸国ばなし』の「花車の道」と同じであるという解釈も成り立ってくる。さらに同書の「茶湯者覚悟十体」には、

一、茶湯者ハ無能ナルガ一能也。紹鷗ノ弟子ドモニ云ハレシハ、人間ハ六十定命ト云トモ、身ノ盛ナル事二十年。不断茶湯ニ身ヲ染ルサへ、何ノ道ニモ上手無シ。芸ニ心ヲカケバ皆々下手ナルベシ。但、書ト文学ハ心ニカクベシ、トモ云ハレシ也。

とあり、但し書きに「書」と「文学」への造詣が加えられている。このことについて桑田忠親氏は、

一 紹鷗三十年まで連教師也。三条道遙院殿『詠歌大概』之序を聞き、茶の湯分別し名人になられたり。是を密伝にす。印可の弟子に伝えらるる也。

の同書の記述を根拠にして、「紹鷗が特に三条西実隆に学んだ文学者であった関係であろう」との指摘をしている。『山上宗二記』には、このほかに、

一 紹鷗定家色紙。今井宗久に在り。下絵に月を書く也。安部仲丸が天の原の歌也。宗及色紙、下絵律なり。八重律の歌也。

とも見られ、(C)(D)の説話との一致が指摘できる。西鶴が『山上宗二記』を閲覧していたかどうかについて

確固たる証拠を示すことは不可能であるけれども、こうした記述の重なり方は、「灯挑に朝顔」の章にその影響の可能性があることを示唆するものであると考える。

茶の湯の教えに文学を重ねて示すものとしては、この他に『石州三百箇条』第二巻にも、

二 茶湯ハ仏法 歌道を兼たる由申伝候、詠歌大概に情以新為先、詞以旧可用と有、茶道ハ仏道・歌道かねたる物なり、新為先、詞以旧可用と定家卿か、れ候ことく、道具ハ以旧時の組合せハミな情を新敷するをよしとす、よく茶湯に叶候とて、紹鴎、定家卿を賞美して、定家の色紙を用候なり、……⁽¹⁰⁾

と見られたり、『遠州流茶書』に「数奇も歌道も同前にて候。古きを以て心新きの本意候⁽¹¹⁾」と見られたりすることから、茶の湯を和歌から説くことは、けっして特異な表現ではなかったことが窺えよう。

こうして茶の湯の伝書を閲したとき、茶の湯と和歌は時に一体化したものととして認識されていたことが考えられ、導入部で和歌のことが説かれているからと言って、この章が後半の和歌の掛け物にまつわる(C)(D)の説話に焦点が当てられて書かれた章であるとは即断できないのである。

むしろ、導入部分が、先の『利休茶湯書』のような茶の湯の伝書の記述に似せてわざと高尚に書き出している感があるのは、その高尚さと、次の(B)説話「朝顔の茶の湯」の話の滑稽さとの落差が醸し出す「おかしさ」を企図したと考えるべきではなからうか。

朝顔の茶の湯と「灯挑に朝顔」

「朝顔の茶の湯」は、千宗旦(天正六〜万治元/一五七八〜一六五八)から藤村庸軒(慶長十八〜元禄十二/一六一三〜一六九九)が聞いた話をまとめた『茶話指月集』(元禄十四年刊)に紹介される、次の話に拠るものとされている。

宗易、庭に牽牛花みことにさきたるよし太閤へ申上る人あり、さらは御覧せんとて、朝の茶湯に渡御あり

しに、朝かほ庭に一枝もなし、尤無興におほしめす、扱、小座敷へ御入あれハ、色あさやかなる一輪床に
けたり、太閤をはしめ、召つれられし人々、目さむる心ちし給ひ、はなハた御褒美にあつかる、是を世に利
休かあさかほの茶湯と申伝ふ、

附

かやうに吹たる花を皆はらひ捨、一輪床にいでて、人をおもしろからするハ、休か本意にあらず、いか、
といふ説あれとも、朝かほを興にて茶湯つかうまつれと仰らる、うへハ、一輪床にいでたるか、休が物す
きのすぐれたる所也、その後、遠州公の比より、露地に花うへられす、是も茶湯の花を一段賞翫の義なり⁽¹²⁾

元禄期以前に、茶の湯のひとつの形式として「朝顔の茶の湯」がすでに存在していたのは事実で、湯川制「朝顔
の伝」⁽¹³⁾では、茶会の記録なども含めて調査し、その存在を確認されている。実際『針屋 宗春翁茶湯聞書』（慶
長五ノ一六〇〇年奥書）に、「春の数寄」・「夏の数寄」・「秋の数寄」・「冬行きの数寄」と並んで、

一 朝顔の数寄、客入候時、墨跡なし、花計を入候。中立の後、花を取、墨跡を掛候。座敷半に成共、朝顔
しばみたらば、其儘取候。朝顔の数寄は客もはやく参候也⁽¹⁴⁾

とあるなど、かなり早い時期から「朝顔の茶の湯」が特化されていたことは事実といえる。西鶴の作品でも、『西
鶴織留』巻五の四「具足甲も質種」に、

都につゞく伏見の里、通り筋の外今の淋しき、殊更秋は物あはれに、垣根に咲きたる朝顔の茶の湯の沙汰
も絶て、手釣瓶の縄をたぐり捨てかけたたり。

とあったり、『好色五人女』巻二の三「京の水もらさぬ仲忍びてあい釘」の冒頭に、

朝顔の花のさかり、朝詠はひとしほ涼しさもと、宵より奥さまのお、せられて、家居はなれしうらの垣ね
に腰掛をならべ、花氈しかせ……

と見られたり、『好色一代男』巻一の五「尋ねてきく程ちぎり」に伏見の遊女の父である源八が山科で昔気質に
暮らしている描写に「柴のあみ戸に朝顔いとやさしく作りなし」とあることなどから、朝顔が、秋（夏）の花の

中でも「風流な存在」として特別視されていたことがわかる。

当時の「朝顔の茶の湯」の有り様を知るには、先の『利休茶湯書』の、

一 朝かほの茶湯の事、はじめ花を生、後にかけ物かくる事也、朝顔を明日生んとおもふ宵より切候て生置候へはさかろくにいなをる物なり、それを生るなり

という記事や、遠藤元閑『茶之湯六宗匠伝』（元禄十五／一七〇二年刊）四之卷（古田織部伝書）に見られる次の記事が参考となる。

一、花は分て朝顔を賞翫する也。朝がほはいつも心よく咲花をみれば咲べき花は宵からしれ候。それとは翌日さく花は宵より大にふくれつほみ有、其所を見たて花々能所へ付てつる時に切べし。然ば翌日花咲申候。夜の内は北の方の水沢山なる方に水の中へ花もつるもすぶと付おけは翌日つるも直心よく咲物也。朝の茶湯の明六つにおきて拵床に花生をなをし置て花を生れば、六つ半時分花さく也。其にてむかひに中くゞりへ出也。客も用意をして出るとき、てい主むかひに出らるゝと早々数寄屋へ可入、扱床に向ひ花を見れば、花心能さきてあり、さて客見物して大目へ往也。次第くゞりに座へ付てい主ふくべ持出炭せらるゝ也。見物してすみをほめ、花の事よくほめて、料理すみ、中立をする時はいつも名残花見れ共、此花は名残り見る事なし。手水に立也。是を客振の大事習とする也。となり座敷に入也。其より常習事なし。是朝顔の大事也。¹⁵⁾

また、こうした「朝顔の茶の湯」がやがて秘伝化されてしまったことの実態を示すものとして、藪内竹心紹智（延宝六／延享二／一六七八／一七四五）『源流茶話』が挙げられる。

問 或茶人朝顔の茶湯とて秘事の由申され候。左様に候や。

答、世に朝かほの茶湯と申由來ハ、古へ秀吉公、利休力露地に、朝かをの見事に咲きたる由聞し召れ、朝会渡御なりしに、一葉もなく払い捨てげり、扱、御入有しに、床の下地窓にさもうるハしき花一輪、つるおかしくあしらひたり。公上覽有て、花の専すぐれ思召由御感浅からざりしより申ならハし候。朝顔は花の體、暫

時におとろへ候へハ、朝会の初座二生、中起後二懸物をかくる、是外つるの習の外に、秘事と申儀は不承候、世に香炉の茶湯など、て、名目付られ候も、此たくひにて、皆初心の人の申事にて候、但シ細川三斎翁、朝会にあさかほの花御生有、会膳の前に給仕して、花を御ひかせ候、有人、其故を御伺申れしに、

よしさらハ散迄ハ見し山さくら花のさかりを面影にして

此心と伝られしとなり、ケ様の事を伝へられしにや、無覚束被存候、¹⁶⁾

このように「朝顔の茶の湯」といっても、通常は掛け物を初座に掛けるところを、朝顔の花を生けておくという程度の違いしかなかったのに、茶人たちの中にはそれを「秘事」として権威づけ、さも特殊な複雑な点前があるかのごとく吹聴していた者がいた。それが、『西鶴諸国ばなし』のように「こざかしき者ども」が「朝顔の茶の湯をのぞ」む原因になったのであろう。

さらに、この「朝顔の茶の湯」の習いを「灯挑に朝顔」の章の構成と重ね合わせてみるとどうか。前半に花の話が置かれ、後半が和歌の掛け物の話であると言う点で、まったく「朝顔の茶の湯」の形式と重なっていることに気づかされる。「朝顔」の話が先に置かれ、後半に「掛け物」の話二題が置かれている形式は、まことに「朝顔の茶の湯」の習いそのものなのである。西鶴がはたしてそこまで意図して編集したかどうかは、もちろん議論の残るところであろうが、先の宗政氏の論考にあるように、この章が綿密な構造による「はなし」であるとするならば、むしろ世間でもはやされた「朝顔の茶の湯」の「秘事」そのものを、さりげなく話に合わせて構成し、「知る人は知るぞかし」の姿勢を西鶴が意図したとしても不思議はあるまい。また、このことは導入部との間に違和感があるとされる「朝顔の話」が、前半に置かれたことへの一つの根拠ともなる。

このことから、やはりこの章は単純に四つの部分に分けるのではなく、導入部は別として、「奈良のひがし町」の近年の茶人による「亭主も客もひとつの数寄人」ではないために起きた滑稽譚の前半部と、「むかし巧者」の「客」と一体となった茶の湯譚二話の後半部という、二つの部分に分けて読むべきではなからうか。

朝顔の茶の湯の滑稽譚としての意味

この章における(B)「朝顔の茶の湯」の部分について、森田雅也『西鶴諸国ばなし』試論(下)では、次のように述べている。

しかし、この章では後半の二話が風流人である亭主と風流を解する客との風交を描くが、前半の一話は逆である。三話をこのように配するの何らかの意識を認めなくてはいけない。第一話の亭主はなるほど風流人である。それに比べ、客の無粋さは、ひととおりでない。亭主の報復の昼の「灯挑」、芋の葉の「朝顔」にも屈しない。というよりも両者の次元が違うのである。この亭主の常識を超えるレベルの人間の出現は、まさしく、卷三の六「八畳敷の蓮の葉」の策彦和尚に対する信長や卷四の三「命に替る鼻の先」の天狗に対する檜物細工屋と構図を同じくしているのである。¹⁷⁾

また、堀切実『西鶴諸国ばなし』における〈笑い〉の種々相¹⁸⁾においては、

このなかで、まだお昼前なのに灯挑の趣向に合わせて、客も暗いところを歩くようなしぐさをする滑稽を描いたところも、なんともコミカルな笑いであり、これは現実の人間の心理や行動に根ざした、リアルな笑いを導いてゆくギャグであろう。こうしたギャグには、誰でもどこか思い当たるふしがあるものなのである。いずれも、咄のストーリーの展開とか登場人物の性格とかにはあまりかかわらずに、ただ突発的に発生する〈笑い〉なのである。¹⁸⁾

として織田作之助の「コミック」の概念を引用して、この部分の「おもしろさ」を述べている。

この話が、森田氏ように客の側からの無礼なふるまいにのみ焦点が当てられて読まれること対して、私は茶人のあるべきふるまいから外れた亭主の側にも問題があると考ええる。『山上宗二記』師二問置密伝ヲ拙子注之條々¹⁹⁾に利休が教えた言葉の一つとして「一、御茶湯者朝夕唱語 一 志 二 堪忍 三 器」とあり、ここについて、桑田忠親氏は「堪忍とは何につけても辛抱し寛仁であること。寛仁の徳がなくては志も遂げられないわけだ」と

解説していることから、この亭主に落ち度を認めず、客にばかり非を求める読み方には問題があるといえよう。さらに朝顔の花そのものが当時極めて珍しくて、その咲き時も世人にはわからないと言わなければならないはず。「懐硯」巻一の一「二王門の綱」に「朝顔の昼におどろき」とあるほどであり、朝顔の咲き時が分からないはずはない。にもかかわらず、「朝顔の茶の湯」と銘打った茶事を自分たちから望んで、亭主も「兼ね兼ね日を約束し」てあったのに、客の「昼前に来て、案内をいふ」という態度には、あまりにも間抜けぶりに誇張がありすぎはしないだろうか。それを単なる無知から出た「不作法」な行為としてのみ読むことには問題がある。とするならば、ここにこそ堀切氏の指摘される（笑い）に向けての表現が企図されていたとすべきでなからうか。またそれだからこそ、「昼の灯挑」をともしたり、「土つきたる芋の葉を生て見」せたりする亭主の大人げなさ、それに全く動じない客の間抜けさも誇張されてくるわけである。

客も客ならば亭主も亭主であるという、こうした行き違いは、人が人をもてなし「亭主も客も心ひとつ」になることを究極とする「茶の湯」にはあつてはならないことである。それを敢えてお互い平然とやっつてのけながらも、それを「茶の湯」として信じる人々そのものが、西鶴を含めた世上の人から見れば森田氏の指摘する「人ばけもの」の類として映つたと考えるべきであろう。江戸も後期になると風変わりな人を「とんだ茶人だ」となじるようになったり、明治期に「金持ちの貧乏人ごっこ」と揶揄された茶人たちのあり様を、西鶴は早くに認め、活写していると言えよう。

茶人が本来目指していくべき茶の湯の本質を見失い、超俗を装いながらも、きわめて俗な世界に縛られている姿を、この話は描き出そうとしたのである。もちろん、その滑稽さをより一層醸し出すために、佐伯孝弘「南嶺氣質物と笑話」に指摘される『鎌倉諸芸袖日記』（寛保三／一七四三年刊）巻二の一「茶人の慇懃丸裸の亭主」の背景にあるという『戲言養気集』（元和頃）上巻「信濃国ふかしの云所」の「作法知らずが人真似をして失敗する咄」の笑話の型を踏襲している点も見うけられる。²⁰また、この話は『はなし大全』（貞享四／一六八七年）下巻では「十五 茶の湯を知らぬ村の者」として、

在郷寺の住持、百姓旦那に濃い茶を振る舞ふべきよし、申しやらるる。百姓、まいるべしとは返事しければ、濃い茶の飲みやう知らざれば、打ち寄りて談合する。そのうちに江戸通ひして、少しやうすを知りたる者、「みなく、気づかいし給ふな。われらをば師匠にして、真似をしやれ」といひければ、「それならば、いざ行かん」と、師匠をば先に立て、旦那寺へまいりける。菓子にみづから出たりしを、師匠取つて一つ食ふ。何とかしけん、山椒にむせ、水を飲まんと、ゐざりながら手水鉢の方へ行く。つぎくくの百姓ども、みづから一つ食ひ、ほんにむせたるふりをして、これもいざりて縁へ行く。師匠、なんぎに思ひつつ、「よしにせよ」とて手をつかへば、また同じやうに手づかへをした。²¹

というように所載されており、一層茶の湯との関係の深さを窺わせる。こうした「物まね型」とも言うべき茶の湯の初心者への失敗による滑稽譚は、まさしく「きやくはまだ、合点ゆかず、夜のあし元するこそ、をかしけれ」の部分に通じているといえよう。

また、朝顔の茶の湯の話では「大かた時分こそあれ」とあるように、茶の湯における約束の時間の問題も挙げられる。この話に似た茶話に、稲垣休叟（明和七—文政二—一七七〇—一八一九）『松風雑話』巻四（小枝略翁『茶事集覽』嘉永二—一八四九年序所収）に見られる千宗旦と金森宗和との間での刻限の認識の相違による行き違いがあつた話が挙げられることは、以前に指摘した。その際には調査が足りず、原話の確定ができなかつたが、その後、『十三冊本宗和流茶湯伝書』（寛文頃成立）の中に、

千宗旦、宗和老へ茶の場所望にて来ル。未明に参候へとも、夜明被入候事。扱又、茶入れ乞候へとも見せずに入たり。此事分有。只人に候へは、何時乞候ても、被為見事也。茶の場者と名譽の者、こい所をちかへ不宜ル故見せ不申、又、分もなく未明に可参事もなく候故、為待置、夜明常の時分に被入候也。²²

という記事を見出すことができた。この記事から宗旦と宗和の時刻の行き違いの話は、史実としてあつたことは確実である。さらに宗和は特に時刻に対してやかましかつたようで、そのことは先の伝書に「不好事」の第一として「一 客時分むさと早く行事、遅ハ猶以也」と挙げていることからわかる。さらに、宗旦と宗和の不仲に

ついでに『不審庵伝来元伯宗旦文書』(二五〇・一五一)に「金盛うそつき茶湯⁽²³⁾」と宗旦が書き遺している点も注目すべきであろう。

こうした茶人同士のちよつとした行き違いを、茶の湯に関わらない普通の人たちが眺めた場合どのような感じを受けるであろうか。たかが刻限が多少ずれたこと程度で大騒ぎをする訳のわからない存在であると映つたのではなからうか。現在でもお茶を嗜まない人たちから見た茶道界は、閉鎖的でまことに理屈がわからない世界に見えるようである。そのために、普段ちよつと「薄茶でも」と誘おうものなら、すぐに「不作法でして」とか「嗜みがないもので」と返答され、拒絶されてしまう場合が多いのではなからうか。茶を嗜まない人々からすると、茶人たちは、たかが一杯の茶を「飲む」という行為にたいそうな権威付けをしている別世界の人たちとして奇異に見られている証拠であろう。西鶴の時代にあつても、すでにそうした風潮は見られたのかもしれない。それゆえ、「朝顔の茶の湯」に翻弄される「楽助」と「ござかしき」客と珍妙なまでのやり取りは、現実味を帯びた滑稽譚として成立し得たのだと考える。そして、この一話が前半にあつてこそ、後半の「昔」の「巧者」の話が、茶の湯の本質をついた話として際だつてくるわけである。

おわりに

延宝期を境として「咄本の質が変わりつつあつた」と江本裕氏は指摘する⁽²⁴⁾。「西鶴諸国ばなし」がそうした文芸的環境の変化の中で創作されたとしたならば、「朝顔の茶の湯」の話は、まさにこの変化に従つた「軽口」を志向した話として読むことができるのではなからうか。では後半の二つの話はどうか。これらは、小林幸夫氏に詳しい研究がある信長・秀吉の時代から続く伝統的「数寄雑談⁽²⁵⁾」の流れに立った巧者譚に属する話であることは、改めて言うまでもあるまい。

つまり「灯挑に朝顔」の章は、西鶴が茶の湯にまつわるこうした「咄」の二つの型を、前半と後半にうまく連

携させて、古今の茶人の姿を世にあぶり出して紹介した章と考えられる。「亭主も客も、心ひとつの数寄人にあらずしては、たのしみもかくる」ことを、当時の茶道界にいかにもありそうな咄として成立させているのである。「春日の里」とあるから、奈良の実在の茶人がいて、その人の話として読むべきだという見解もある。もちろん、「かくれもなき」とまで書くからには、具体的な茶人を想定しているはずであることには、異論はない。しかし、このような滑稽な茶事が本当に行われたのかと言えば、いかに客が初心者とはいえあり得ない話だろう。また、それほど著名な茶人が客に対し、ここまで嫌味な行爲をしたとして、後日の世評がどうなるかを考えないはずがない。とすれば、この話はあるモデルを想定して読むよりもそれはそれとして、あくまでもありそうな話として作り出された話として考えるのが、自然であろう。後半の原話のモデルがしっかりしていればしているほど、ますます前半の「朝顔」の話も、本当らしく見えるわけである。

「茶人づら」という言葉があるけれども、西鶴はその「茶人づら」を前半部で引き剥がして、近年の茶人の正体を見せ、後半部で当時忘れられていた茶の湯の本質というものを改めて問いかけようとしたのである。「灯挑に朝顔」で「人はばけもの」を説こうとした西鶴の本意はそこにあつたといえよう。

〔注〕

- (1) 藤井隆「西鶴諸国ばなし小考」『名古屋大学国語国文学4』昭和三十五年
- (2) 宗政五十緒「西鶴諸国ばなし」の成立」野間光辰編『西鶴論叢』中央公論社 昭和五〇年
- (3) 佐藤悟「灯挑に朝顔」の構造」『実践国文学33』昭和六十三
- (4) 石塚修「西鶴諸国はなし」に何を讀むか——「灯挑に朝顔」を中心に」『江戸文学23』ぺりかん社 二〇〇一年
- (5) 有働裕「西鶴諸国ばなし」論の課題」『西鶴はなしの想像力』翰林書房 一九九八年
- (6) 宗政五十緒 前掲書 三〇七頁
- (7) 本文は、千宗左ほか編『利休大事典』淡交社 平成元年によった。
- (8) 本文は、桑田忠親『山上宗二記の研究』河原書店 昭和三十二年によった。
- (9) 桑田忠親 前掲書 二九八頁

- (10) 千宗室編『茶道古典全集』第十一巻 淡交社 昭和三十一年 二三四—二三五頁
- (11) 橋本博編『茶道大鑑』下 大学堂書店 昭和八年 一一二頁
- (12) 千宗室編『茶道古典全集』第十巻 淡交社 昭和三十一年 二一一—二一二頁
- (13) 湯川制「朝顔の伝」『利休の茶花』東京堂出版 昭和四十五年 一四九—一六三頁
- (14) 桑田忠親編『新修茶道全集』九巻文献編下 二三八頁
- (15) 橋本博編『茶道大鑑』下 大学堂書店 昭和八年 一九四頁
- (16) 千宗室編『茶道古典全集』第三巻 淡交社 昭和三十一年 四四四—四四五頁
- (17) 森田雅也「西鶴諸国ばなし」試論(下) 『日本文芸研究』第五十三巻第二号 十三—十四頁 二〇〇一年
- (18) 堀切実「西鶴諸国ばなし」における〈笑い〉の種々相 『読みかえられる西鶴』ぺりかん社 二〇〇一年 一九六頁
- (19) 桑田忠親 前掲書 二二二頁
- (20) 佐伯孝弘「南嶺氣質物と笑話」延廣眞治編『江戸の文事』ぺりかん社 二〇〇〇年 六一—七頁
- (21) 浜田義一郎ほか編『日本小咄集成』上巻 筑摩書房 昭和四十六年 二一一頁
- (22) 本文は、谷 晃『金森宗和茶書』思文閣出版 平成九年によった。
- (23) 千宗左編『不審庵伝来元伯宗巨文書』主婦の友社 昭和四十六年 二〇八・二〇九頁
- (24) 江本裕「先行文芸の撰取と飛躍」谷協理史ほか『西鶴を学ぶ人のために』世界思想社 一九九三年 九八頁
- (25) 小林幸夫「茶の湯と雑談」『咄・雑談の伝承世界』三弥井書店 平成八年
- 西鶴作品の本文は『対訳西鶴全集』によった。

附記

本研究は、平成十二年度財団法人三徳庵「茶道文化学術研究助成 奨励研究」を受けての研究の一部である。本研究は、平成十三年八月三十日青山学院にて行われた第十三回「西鶴研究会」の発表を基にした部分大きい。席上種々御教示いただいた篠原進先生はじめ会員の皆様に、記して謝意を表させていただきます。